

おいては、その多くはいづれも共産黨とは相容れ難いのである。

蔣介石にせよ、前に述べたやうに共匪討伐のためには五ヶ年も苦しんだのである。西安事件によつて共産黨との妥協を強要されて以來、彼の行藏には變化を來したとは云へ、恐らくその本心は共産黨に許してゐないであらう。また、今、重慶の軍政部長として、抗日戦の帷幄を掌つてゐる何應欽の如きも、蔣の共匪討伐に當り終始辛苦を共にした經驗を持つてゐるのである。彼が心中、共産黨に對しどんな感情を懷いてゐるか察するに難くないであらう。

又、これを財界方面の要人について見るも、重慶交通部長の張公權とか、曾て華北銀行の領袖であつた現重慶貴州省長吳鼎昌等、いづれも肚の底からの共産嫌ひである。曾て私はこれらの人々に

「一體、君等は何で蔣介石を助けるのだ。いくら軍資金を注ぎ込んだところで、結局たゞ紋取り取られてしまふに過ぎぬではないか。公債なども、云ひなり放題に引受けてゐるやうだが、何時返して呉れるかわかるものか。第一蔣介石自身の勢力がいつまで續くかといふ根本が不明ではないか。」

と質したところ、吳鼎昌は

「見渡したところ、今日中國の軍人で、本當に共産黨の討伐が出来るのは蔣介石一人しかない。共産黨は何としても討伐せねばならぬから、その意味で蔣介石を助けてゐるのだ。」

と、蔣介石援助も、根本は共産討伐にあるとの見解を明かにしたことがあるが、恐らくこれはひとり吳鼎昌に限らず、中國財界人が蔣を援けて來た本當の動機であらう。

さきに上海市長であつた吳鐵城なども、全く同じやうな見解であつて、曾て、私は彼といろいろ時局を談じたことがあるが、彼はその時

「高木さん、日本でも共産黨は問題になつてゐるやうですが、日本の共産黨などは口だけで、時にテロをやつて見たところで知れたものです。ところが中國の共産黨となると軍隊を持つてゐるので、日本のとは少し桁が違ふのです。どうしてもこれは單に討伐といふやうな生やさしい事で済ますわけにはゆかない。剿滅——さうです剿滅せねばなりません。」

と、剿滅といふ言葉に特に力を入れて、私に語つたことがあるのである。

そして、今日、蔣介石の中央軍配置の實際について見ても、重慶が共産黨に對してどんな考を持つて居るか察するに難くないのである。即ち、蔣の直系軍たる中央軍が日本軍の矢面に立つたのは、ほんの支那事變の當初だけであつて、わが松井軍司令官が上海に上陸して第一戦を

交へた頃から大場鎮が陥落する頃までは、成程中央軍が矢面に立つてゐたやうであるが、其後
は我軍の矢面には専ら雜軍を立て、中央軍は専ら共產黨の監視的配置について居るのである。

例へば、福建で共產軍討伐に偉功を樹て、共匪討伐の勇將として、一躍、その名を謳はれた
蔣鼎文を陝西方面の共產軍の背後に配し、又蔣がその腹心として信頼してゐる胡宗南とか朱紹
良とかを、それ／＼共產軍擔當戦區に配置する等、彼が如何に共產軍の勢力牽制に肝膽を砕い
てゐるか、苦心するところが自ら窺はれるのである。噂によれば、重慶に昨年暮頃、ひそかに
防共協會といふものが結成されたとも云はれてゐるのである。

いづれにしても、中國における共產黨問題今後の動向は、重慶側にとつて頭痛の種たるに止
まらず、南京國民政府にとつても亦看過を許すことの出来ぬ重大問題であらう。この意味にお
いても、國民政府主席としての汪精衛氏の存在は吾等の最も意を強うするところである。

元老・先輩の想ひ出

私が初めて講演をやつたのは明治四十三年であつた。時の海軍大臣齋藤實大將、副官山梨勝
之進少佐（現大將、學習院長）からの所望で、「支那の鐵道」の題下に海軍省の應接間で約一時
間やつた。これが自分にとつては、支那問題に關する講演の皮切りであつたのである。何故に
「支那の鐵道」に關する講演をやつたかといふに、實は次のやうな経緯があつて、そのことが
海軍大臣の耳に入つたので、それで「支那の鐵道」といふ講演となつたやうなわけで、私にと
つては、深い因縁があつたのである。即ちその頃、日本が初めて中國において鐵道建設の事業
に乗出すこととなり、自分がその問題について特別な關係を持つて居たといふことに始まるの
だが、その鐵道建設問題とはかういふことであつた。

當時は歐米列強の中國分割、勢力範圍設定の機運が盛んな時であつた。これより先、日本は
中國政府をして福建省の不割讓を約さしめた（明治三十一年四月）、この福建省の福州から中原
の揚子江に出る鐵道を計畫し、中國側においても揚子江沿岸の江西省九江から同省首都の南昌

に到る鐵道を敷設し、行く行くは更に南に延びて福建省境に到らしめんと議があつた。(江西鐵道、後に南潯鐵道となつた)そこで日本側としても此鐵道に投資して關係をつける必要がある。偶々對華投資を目的として東亞興業會社が設立されたので、同社の最初の事業としてこれを取上げた。日本政府も此運動を援助し、當時上海總領事館にあつて外交官補だつた松岡洋右君なども熱心に助けたものだつた。私は當時漢口の三井物産に居た頃であるが、この鐵道計畫のあることを聞いて、日本側から建設資材を賣り込まうと考へ、早速九江へ出張した。偶々江西鐵道の總經理たる劉景熙と會見して、いろいろ話をして居るうちに、意氣投合するやうになり、時には日華關係の全局に就いてまでも忌憚ない意見の交換をするやうな間柄となつた。

一寸話が横道へ外れるが、この劉景熙といふ男は實に立派な人物であつた。鐵道建設などといふ話には兎角面白くない話がついて起り易いものだが劉には微塵もさうしたところがない。いつも私の方で彼に晝食を御馳走になつて居たけれども、私の方から彼を御馳走したことがない。そして彼はいつも口癖のやうに、「俺が九江に居るうちは俺が御馳走する。その代り俺が日本へ行つたら、大いに御馳走にならうぢやないか」と言つて居た位で實に立派な態度であつた。

なほ同鐵道の總理は陳三立氏であつた。陳は有名な學者で、息子の陳衡恪氏は日本に留學し

高等師範學校を出た人だが、晝が上手で、北京に於て晝家として有名であつた。南の吳昌碩などと聯び稱されて居たが、大正十四、五年頃亡くなつた。

さて、さういふ次第で劉を對手に交渉を續けて居たが、何分にもまだ中國では居留地外へ外國人が出て行つて仕事をするといふことは許されて居なかつた時代なので、交渉は相當困難であつた。結局、曲折を経て、九江南昌間の南潯鐵道は東亞興業會社の出資により大倉土木組が工事を請負ふといふことに話を漕ぎつけたものであつた。尤も右のやうに居留地外での外國人の仕事はいろいろ困難を伴ふ事情にあつたので、請負者の名儀も大倉組とせぬことにした。まだ大倉喜八郎翁在世中のことであつたが、色々劉とも相談して、大倉公司では直ぐ日本人の會社といふことが判るからといふので、大倉の會をもちつて新しく「久樂公司」と命名して、その久樂公司がこの鐵道の建設工事を請負ふことにしたのであつた。

何れにしても、中國の鐵道を日本が請負つて工事をするといふことはこれが初めてのことであるから、大倉組としても非常に名譽の事に思つて、鶴彦翁も大變喜んで、私に是非何か御禮をしたといふのであつた。しかし自分は三井物産のものであり、且つ中國側と昵懇にしてゐたから出來たまでのことであるといつて斷つたが、何とかして御禮をしたいと強つての申出で

なので、「それでは大倉組の重役連が私に頭を下けたらよいでせう」といふやうな笑談をいつたところが、鶴彦翁はすかさず大倉久米馬とか、門野重九郎とかの幹部を集めて、築地の新喜樂に招宴を設け、銀の煙草入に「清國工程包辦記念」云々と刻み込んで贈つて来たものである。

爾來、大倉翁とも昵懇となり、赤坂の自邸や銀座の店などへも屢々呼ばれて、いろ／＼支那問題について意見を問はれたものだが、流石はあれだけの大をなした人だけあつて、事支那問題に及ぶと全く私心を離れて談じ合つたものである。また私も三井物産のものではあるが、中國の話になると、自分の事でも「俺は三井の人間だ」といふことを忘れて話に熱中した。翁も亦同じ考で話に傾倒するといふ風であつた。

その後間もなく私は漢冶萍煤鐵廠鑛公司の日本商務代表者として三井物産を退社することとなり、其後大正十二年に中日實業を引受けてからも、翁の逝去するまで翁との交渉、殊に支那問題に關する交渉は續けられて来たものである。

一方、東亞興業會社の方でも、此の鐵道建設借款の成立に對して何とか禮をしたいといふことであつた。時の社長は古市公威男であつたが、自分は「強ひて禮をしたいなら三井の方へしたらよからう」と云つたので、その結果、東亞興業の古市男と三井の益田孝男とが相談して、

社長から禮狀に目錄金一封（千圓）を贈るといふことに話がついた。これが原因で自分は東亞興業の仕事も手傳ふことになり、中國への旅費なども、三井と東亞興業の兩方から出すといふやうになつた位であつた。

大分説明が長くなつたが、かういふ事情から中國の鐵道問題について色々内部事情を知つて居たし、旁々海相官邸における講演といふことに話が發展したのであつた。

私は、その席で終始全く私心なしに中國問題を話した。しかも中國人との交誼において常に誠心誠意を以て應對して居たので、例へば高松如（湖北官錢局總辦）、張志譚（內務總長、後に交通總長）、劉景熙、李維格（漢冶萍公司總經理）、高凌霨（前攝政、國務總理）といったやうな仁、そのほか心を許し合ふことの出来る友人を中國人の間にいくらかも得られたといふ話をした。大倉鶴彦翁などはかうした私の話を最も素直に受入れた人であつた。

これと同じことを自分は又岩崎久彌男にも見ることが出来るのである。私は三井出身であるから、三井の方で團琢磨男とか有賀長文氏とか、随分私を信じて呉れた先輩のあつたことは言ふまでもないが、三井出身であるにも拘はらず、私を最も信頼して呉れたと今でも思はるゝ人は岩崎久彌男であつたと思ふ。後に滿洲の方で仕事をするやうになつてからも、少なからず同

男の世話になつたことを感謝して居る次第であるが、同男と同時に總理事の江口定條、木村久壽彌太、串田萬藏氏なども話し合つたが、いづれも事は中國問題ではあつたが、いつも素直によく話が出来たものである。

そこで私は結論的な確信を持つて居る。即ち、私はいつの場合、また如何なる時でも、中國人と話をする時何等の策を用ひない。それは話してゐる相手に若しも誠意があるならば、こちらの誠意を必ず素直に受入れるものだと思つてゐるからである。さうして今日まで四十餘年間、未だ曾て支那人に裏切られたことがないのである。孟子の所謂「至誠にして動かざるは未だこれあらざる也」である。

明治の元勳のうちでも、最も印象の深いのは井上馨、桂太郎の兩元老である。伊藤博文、山縣有朋の兩元老とはあまり深い交渉を持たなかつたし、西園寺公望公とは多少折衝はあつたが、それも餘り屢々ではなかつたといふ次第で、印象が少い。元老以外では伊東巳代治伯、山本權兵衛伯など幾多の思ひ出がある。こゝに自分の接觸した範圍に於て、元老と老人との片貌を想ひ起して見たいと思ふ。

井上侯とは明治四十二年頃から薨去に至るまで最も接觸が多く、よく内田山や興津などへ呼び出されたものである。神経痛になる前の井上老侯は非常に几帳面で、客と對座する時はいつもキチンと端坐してゐた。しかしなかなか思ひやりがあつて、若い者などには努めてアグラを勧めて呉れたものである。いつか早川千吉郎氏と同席したことがあるが、早川氏などは實にキチンと端坐して、老侯の話を傾聴して居た。

また、非常に眞面目で、客が歸るとなると老侯は必ず長い廊下を玄關まで見送り、客が車に乗るまで玄關に立ちつくして居るといふ禮儀の正しい方であつた。これなどは大いに學ぶべきであらうと思ふ。

明治四十三年頃から東京にもボツ／＼自動車が姿を現はすやうになつたが、さて自動車を持つて居るものでも、内田山へ老侯を訪ねるもので、玄關に自動車を乗りつけられるものは極少く、三井あたりの連中は誰でも——山本条太郎氏さへも、自動車は道路へ乗捨て、歩いて來たが、人力車で來たといふ風を装つて、老侯の前へ出たものである。

井上老侯の「雷」は有名なものである。この「雷親爺」の雷が錚々たる實業家の頭上に手厳しく落ちたのを幾度か直接見たことがある。殊に興津での話であるが、時の日本興業銀行總裁

添田壽一氏が、日佛銀行の問題で、老侯から頭から怒鳴られてゐるのに出會つたことがあるが、傍に居て實に恐縮したことがある。

これも興津での想ひ出の一つであるが、或時興津を訪ねると、一人の見馴れぬ男が、慇懃に私を老侯の居間に案内して呉れた。一見骨董屋のやうな風采なので、多分井上邸出入りの骨董屋ぐらゐに思つて居た。ところがこの日私が辭去するに當つて、侯爵夫人も同じ列車で東京へ歸られることとなり、老侯も夫人を興津驛まで見送るといふので、輿に乗つて出懸けて來たものである。

すると、この騒ぎの中に先刻の骨董屋先生も混つてゐて、何かと氣をつかつて居たものであるが、自分はこの男には餘り眼もくれない態度をとつて居た。この自分の態度に氣付かれた井上侯は、停車場に着いてから、徐にこの骨董屋氏を自分に紹介して曰く

「高木君、君はこの方を知らないだらうが、此の方は鴻池の原田君だよ。」

と初めて紹介された。これが有名な鴻池の原田二郎氏（現在原田積善會として残つて居ることは周知の通りで、生前から社會に善根を積んで居た人）かと、はじめて知つたやうなわけであつた。

かうしたいきさつがあつて、さて列車に乘込み發車して見ると、この列車は一等二等の連絡車中で區切つてあつたが、その一等車の方に井上侯の夫人が乗り、二等車の方へは我々の一行が乘込んだ。

原田二郎氏について居た男は従者かと思つたら、これが京都瓦斯會社の専務であつた。列車が動き出すと原田氏は「私は汽車に弱いから失禮ながら寝ます」とことわつて、座席へ横になる。専務氏たちが大騒ぎで、毛布をかけるやら枕の具合を見るやら、ともかくも井上邸では骨董屋かと間違へられるやうな態度をして居た原田氏も、驛から列車が離れると、まるで別人のやうに俄然態度が變つたのだから、實際驚かされたといふ挿話もある次第である。

閑話休題、井上老侯の話といふものは徹頭徹尾國家であるといふことである。そこに一切の私心がない。假に果物の話をして居てもその果物の國家經濟に及ぼす地位とかその將來とかに話が及ぶといつた具合である。常住座臥、夢寐だにも國家を忘れず、常に國家と共にあり、國家を背負つて立つてゐるといふ氣概を以て話されるので、話して居るうちに非常に頼母しさを感ぜられた。

随つて井上侯を訪問して中國問題を話しても頗る張合ひがあつたわけで、自分の話した事は

必要に應じ總て外務大臣やら大藏大臣へ必ず責任を以て話して呉れることが明かだから、餘計こちらにも眞剣に話が出来た譯である。

其後接觸の多くなつたのが桂太郎公であつた。特に公が總理大臣兼大藏大臣時代に最も多く會見する機會があつた。公は自分の顔を見ると、「君は井上や山縣の所へ屢々行くやうだが、俺は總理大臣で大藏大臣を兼ねて居るのだから、實際の責任は俺にあるのだ。だから話があるなら俺の責任においてやらうぢやないか、必要があれば俺の方から元老に話す」と言はれたやうな次第で、最初から非常に安心感を以て接することが出来た。さすがに桂公は政治家で、人情の機微をつかんでかゝるやうであつた。

ある日曜日の朝、約束によつて八時に芝三田の邸に桂總理を訪問した。ところが先客があつて、九時になつても會はぬ。自分も年少氣鋭の時代だから少々中腹となり、「待たされてまでも會はぬでもよい」と歸りかけると、書生が慌て、「まあ今しばらく」ととめる。宥められて辛抱して居るが、九時が十時になつても會見にならぬので、また「總理であらうと何であらうと、約束の時間に會はぬなら歸るまでだ」と歸らうとすると、また書生が來てとめる。

こんなことで結局十一時頃になつて、やつと會はうといふから公の部屋へ行くと、まだドテラ姿で控へて居る。どうやら朝起きたまゝ次から次へと來客に接して居たらしい。自分も待たされたので不満だつたからムツとした顔で會つて見ると、例のニコボンで巧みに宥められてしまふといふやり方である。

當時、中國の漢冶萍公司所有の低磷鐵礦石を持つて來て、日本と合辦で北海道で木炭銑鐵をつくるといふ話が進んで來たので、それについて桂公といろ／＼話をしたのであるが、態度が極めて親切で、事苟くも國家的のことゝなると熱心に話し合ふ。そして「室蘭製鋼所長の山内萬壽治中將には齋藤海相から話させる。北海道長官の河島醇が丁度目下上京中だから、是非會つた方がよからう」といふことで、私を紹介するための長い手紙を其場で書き出し、何だかだで十二時過ぎまで一時間半も會談したので、すつかりいゝ氣持になつて辭去した始末である。

桂公は確に有數の政治家で、卓見を持つて居た。私が漢冶萍公司時代のことであるから、會見の都度、外交上の祕密をも話して、その頃問題であつた四國借款團のことやら對華政策の根本にまで及んだのであつた。つまり當時四國借款團が漢冶萍その他に關心を持つこと多大であつたから、その間に介在して日本の行動にも十分戒心を要する事があつたわけだ。

「君が漢治萍にあつて、揚子江方面で活動するなら大いにやつて貰ひたい。少くとも日本は揚子江方面に對しても多大の關心を持つて居るといふことを列國に判るやうにやつて貰ひたい。そのためにはなるべく派手に大いに經費を惜しまず働いて欲しい。」

といふことであつた。これは日本の滿蒙經營に對する列國の關心を牽制し、列國の耳目を揚子江へ集中せよといふ、公の遠大なる考から出たものと察知されるのであつた。

井上侯は禮儀正しく謹嚴だが、桂公はドテラ姿で應接して一向頓着しない。そこに性格や氣質の相違はあつたが、國家本位といふ一點においては全く同一で、その日常の態度には頭が下がるばかりである。

謹嚴と云へば、大浦兼武といふ人も謹嚴そのものであつた。訪客を玄關に送り出すと云つても、井上侯の方にはまだ親しみがあつたが、大浦子爵のは眞に几帳面でとりつく島もないといふ風であつた。

x

x

x

後藤新平伯は豪放であつた。遞信大臣時代に官邸や大臣室で屢々會つたが、書類を見ながら大聲で話すといふ遣り方で、しかもテキパキして居た。

山本權兵衛伯になると、また大分趣を異にして居る。或時中國問題について話を聴きたいといふから高輪の私邸に訪ねて行つたが、何分にも話好きの辯舌家だから、會ふと間もなく日露戦争の話から始まつて、英國の戴冠式當時の英獨の話など、こちらの話は三十分位で、あとの一時間は伯自らの體驗を滔々と物語るといふ、何しろ辯舌の人であつた。しかし舉措は非常に莊重であつた。

伊藤巳代治伯も亦同様で、中國の話を聴きたいからといふので訪問すると、いきなり外交調査會成立當初からの御自分の功名談ばかりに終始した。その頃政友會の總裁になりたい野心があつたらしく、岡野敬次郎男が樞密院の副議長であつたので、これと諒解をつける必要がある。その岡野男と私とが懇意な間柄であるといふことなどを側面的に考へついたので私が私に對する會見の申込となつたやうである。これは臼井哲夫君の仕事なんだが、こんなことで中國問題の話などはまるで聞かず、伊東伯の獨演會みたいなこと、會見を終つてしまつたのであつた。

加藤大將を語る

大東亞戦争における帝國海軍の活躍舞臺は實に東西一萬哩、南北五千哩に及ぶ廣大なる海域である。凡そ人類が想定し得た最も雄渾なる作戦であらう。

しかも世界における最強二大海軍國を正面の敵とし、見敵必殺の大戦果を擧げてゐるのである。全世界を蹉若たらしめたのも宜なる哉である。

しかし乍らローマは成るの日に成るに非ずである。その烈々たる攻撃精神と、天下無敵の實力とは決して偶然に成つたのではない。實に、無敵海軍今日の精強の陰には、全軍將兵の血のにじむ辛酸のあつたことは云ふまでもないのである。殊に華府軍縮條約の締結を強要されて以來、數による劣勢を、質によつて補はんとしたあの實戰的猛訓練の賜物であることに對し、感謝を忘れてはなるまい。そして實戰的猛訓練と云へば、直に我等の腦裏に浮ぶのは、その創始者と云はるゝ故加藤寛治提督である。

大東亞戦争の輝く大戦果を見るにつけ、今更の如く故加藤大將の映像が、國民の眼底に大き

く映し出されるのも故なきに非ずである。

「故加藤大將を今日まで存命させ、この大戦果を目のあたりに見せたかつた」とは、ひとり私だけの嘆息ではあるまい。

故大將と奇しき因縁に結ばれて、生前格別の御昵懇を願つた自分として、轉た感慨無量たらざるを得ないのである。そこでせめて、その思出を書き綴つて、故加藤大將を偲ぶよすがとせんとする次第である。

私が故加藤大將と相知ることゝなつたのは、故大將の少將時代からであつた。そして中將となつてからは、軍令部次長時代に引續き聯合艦隊司令長官として、例の實戰的猛訓練を直接指揮號令した時代にかけて、一層交渉の機會を持ち、當時中國に來られた時などは、格別の御懇親を願つたのであつた。

次いで大將となり、やがて退官して故大將が私の亡妻の伯父橋本左内の景岳會會長に就任されてからは、不思議な因縁で一層深い關係に結ばれ、私生活の方面においてまで、いろ／＼と交渉を持つたのであつた。と云ふのは、故大將は幼時から同郷の志士橋本左内に私淑し、その

啓發録を師として刻苦精勵されたと云はれて居る。晩年になられてからも、四谷三光町の應接間には、左内が生前信仰してゐた金比羅の位牌を預かり祭つて居られ、日夜禮拜して居られたものである。

従つて景岳會の會長となられた故大將は、會のため随分と盡されたものであつた。ところで私の先年亡くなつた家内の父は左内の實弟に當る。そんな關係で自分は景岳會の理事の末席を汚してゐるのみならず、遺族代表の資格を以て祭典に參列したりなどしたので、會長たる故大將と特別に親密を加へたのであつた。

さて支那事變の前年、即ち昭和十年に、故大將の千代子夫人が自動車で怪我をされ、築地の海軍病院に入院されたことがある。負傷がなほつたので、その豫後を温泉で靜養されることゝなつた。熱海へでもといふ話があつたが、故大將が動脈硬化の氣味があり、熱海の温泉は動脈硬化には不適當だといふので迷つて居られた。

そこで、それなら伊豆山見晴山の私の別莊をお使ひになつてはとお薦めしたのであつた。そこで故大將の御子息がわざわざ別莊の温泉の泉質を調べに來られた。その結果、伊豆山温泉の泉質は、動脈硬化にもよし、夫人の豫後を養ふにもよいといふので、私の伊豆山別莊で靜養す

ることとなり、昭和十年の一夏、千代子夫人と共にこゝで悠々自適されたのであつた。

この別莊は、元來松井石根大將が見つけて呉れたものである。十年程前に手に入れたもので可なり古い建物である。取毀して新築する所存であつたが、どうせ取毀すならそれまで使はうと云ふので、松井大將が今の伊豆山の別莊が出来る前に住まつたことがある。又、松井七夫中將なども住まつたことがあり、軍人に因縁の深い建物である。

見晴山と云ふ地名が示す如く雄大な景觀に恵まれてゐる。相模灣を眼下にして右に伊豆半島の長汀曲浦、左に三浦半島、さては房州の山々まで鬚髯として望まれる。晴れた日には、烟波渺茫たる彼方、大島から三宅島も模糊の間に望むことが出来るのである。さゝやかな應接室、居間、客間、それに浴場、女中部屋と云つた狭い建物であつて、故大將は、その奥の客間に起居されてゐたのであつた。

海に生き、海に戦つた故大將は、悠々自適の間にも、こゝで海を眺め、太平洋の波濤に思を馳せて居たのであつた。恐らく今日故大將の訓育を受けた海の將士が演じつゝある米英撃滅の同じ構想を、故大將もこゝでめぐらしてゐたことであらう。

自分は、この別莊を手に入れてから、一度も住む機會がなかつたが、一昨年心臓を病み、初

めてこゝに静養することゝなつた。そこで古い建物は人に譲り、この機会に新築する考であつたが、事變のため新築も思ふに委せぬことゝなつたので、兎も角、自分の起居する所として、三十坪ばかりの新館を建増しすることにした。

故大將が、新築に當つては出来るだけ東の方に位置すれば、視野が一段と開け、一層雄大な景觀を恣にすることが出来ると云つて居つたので、新館は故大將の意見に従ひ、東隅の斷崖の上に土臺を築いて建てた。お蔭で眺望廣大、病氣静養ではあるが、「居は心を移し」身心自ら暢達を覺ゆるのである。

ところで、この別荘は故大將によつて「碧水亭」と命名され、故大將の謹嚴な筆になる匾額が玄關に掲げられてゐるのである。

別荘の窓から眼下に見下す海の色は飽迄碧い。碧は思索の色であり、悠久の色である。こゝにある時、自分は深く思索し、悠久の日本帝國を思ふのである。恐らく故大將もさうであつたらうと考へる。誠に「碧水亭」とはいみじくも命名したもの哉と思つた次第である。

さて、故大將の筆になる「碧水亭」の匾額は、板とも故大將から寄贈を受けたもので、しかも、なか／＼由緒あるものである。先年樞原神宮の老松が折れ、それから三枚の板をとり、一枚

を呉の水交社に、一枚を徳富蘇峰氏に、さうして残り一枚をこの別荘の匾額に贈られたものである。表には「碧水亭」と肉太に書き、裏には「樞原神宮老松割板、昭和十一年九月」とその出所を明らかにし、且つ題字揮毫の上、板と共に贈る旨を認め、「海軍大將加藤寛治」と署名してある。如何にも謹嚴にして雄渾なる筆致が躍動し、故大將の武人らしい風格が偲ばれてゆかしい。

なほ、自分が心臓を病んで、こゝに静養することになつたので、松井大將が「碧水亭」で心臓を養ふと云ふ程の意味をも含めて、「碧水洗心」と揮毫して贈つて呉れた。自分にとつて忘れ難い「碧水亭」静養生活の思出であり、今、新館の應接間に掲げて居る。

故大將の命名と云へば、茅ヶ崎の自分の別荘にも亦、故大將の揮毫されたものがある。こゝの別荘は四邊、原始林のやうな松林に圍繞されてゐる。そして樹海の彼方に富嶽を仰ぎ、箱根大山の連山が、指呼の間に望まれる。

誠に、松の緑に包まれた千古の静寂境である。そこで「碧靜」と命名されたのであつた。茅ヶ崎の別荘に掲げられてゐるのがそれである。

なほ、自分の手許には、その他にも故大將の遺墨が、二三保存されてある。

一つは「以春風接人」といふのである。大將は海軍きつての俊豪として知られ、その謹嚴な態度と相俟つて、一見近より難く冷嚴のやうにも感ぜられるのであるが、一度、故大將に接したことがある人は、何人も異口同音に評する如く、實際は非常に親切で思ひやり深く、常に「春風ヲ以テ人ニ接シ」極めて近より易く、何となく親しみ易い獨特の魅力を備へてゐた。海軍部内青年將校の人氣を一身に集め、東郷元帥と並び稱されて尊敬の焦點となつてゐたのも故なきに非ずである。かゝる意味において、「春風ヲ以テ人ニ接ス」との遺墨は、正に故大將の立派な人格の一面を自ら筆にしたやうなもので、この額を見る毎に故大將の姿が、まざまざと偲ばれるのである。旁々、自分の座右の銘ともすべく、自分はこれを高輪の自邸の寢室に掲げ、日夜眺めてゐるのである。

もう一つは「且間々」といふのである。經文の偈句よりとつたものであるとか。この方は高輪の應接間に掲げ、その淋漓たる墨痕を通して、故大將の風格を偲んでゐるのである。

更にもう一つ、故大將が認めた刀劍の箱書がある。刀劍について、故大將は一家の見識を持たれてゐたが、自分の所に土井利勝より傳はつたと云ふ土井家傳來の寶刀がある。備前義景の作であるが、故大將がこの刀を鑑定され、立派な刀劍であるから子孫に傳ふべきものである旨

箱書されたのであつた。果せる哉、この刀は今度重要美術品として指定されることゝなつた。刀と共に故大將の箱書も家寶として大切に保存してゐるやうな次第である。

以上、主として、故大將が自分の所に残された遺芳を中心として、故大將の思出を取りとめもなく書き綴つたに過ぎない。而して、故大將の全人格に流るゝものは、たゞ一途の純忠至誠であり、しかも身を持つること飽迄謹嚴にして質素、誠に軍人精神の權化であつた。全海軍の青年將校が、故大將の人格に傾倒し、故大將が恰も帝國海軍の重點たるかの觀を呈してゐたのも故なきに非ずである。

これを要するに、故大將が圍面環海の帝國において、海軍軍人としての國防の重責を痛感して、所謂實戰的訓練を創始し、その偉大なる人格的感化力により全海軍を率ゐ、以て今日の無敵海軍を建設した功績は、蓋し全國民の眞に感謝措く能はざる所であらう。

而して、故大將の人知れぬ苦心は、大東亞戰爭において輝く戰果となつて結實した。故大將の生前は必ずしも常に恵まれて居たとは稱し難かつたのであるが、今日この大戦果を見て、定めし地下において、己れの任務を遂行し得た喜びに莞爾として冥してゐることであらう。

本年二月九日故大將の命日に當つて、故大將に終りの人々が品川海晏寺の墓前に額づいて戦勝を報告し、續いて日比谷公會堂で故加藤寛治大將追悼講演會を催した。丁度その時自分は面疔を病んで伊豆山洗心莊に療養中であつたため、その執れにも出られなかつたが、講演會では末次信正大將、柳川平助中將、小笠原長生、小林省三郎兩中將等の追憶談に滿堂の聽衆が感激して傾聽したといふ報告を聞いて、故大將の苦心も漸く酬はれたとの感を禁じ得なかつた。

(昭和十八年)

郷男爵を悼む

大東亞戦争の雄渾なる作戦とその輝く戦果に應へ、今や帝國は内、經濟力の結集を圖り、外共榮圈建設の大經綸に邁進せねばならぬ秋であつて、今日程國家が眞に公平無私にして國家の大局に立ち、わが經濟界を一身に背負つて立つ底の指導者を要求すること大なるはあるまい。こゝに於てか最近におけるわが經濟界の先達として、名實共に眞に財界指導者たるの徳望と力

量と手腕とを兼備せる郷誠之助男爵を憶ふや、洵に切なるものがあるのである。蓋しそれは自分一人のみの感懐ではあるまい。いさゝか茲に故男爵をめぐる思ひ出の一端を録して、その偉材を偲び、追悼の心を寄するも、あながち徒爾ではあるまい。

私が郷さんと面識したのは、かなり以前からのことであつたが、郷さんと直接交渉を持ち本當に郷さんを知り、その人格に接觸するやうになつたのは、大正十一年來、倉知鐵吉氏の後を受けて、「中日實業」を引受けることになつた時からのことである。當時「中日實業」は、中國においては、所謂二十一ヶ條問題に引續く旅大回收運動を中心とする排日の影響を受けて債權の回收思ふに委せず、一方日本側の「中日實業」に對する債權者は、會社に對する債權の取立てを急ぐ等、歐洲戦後の財界不況の餘波を受けて、全く行詰つてしまつたのであつた。

元來「中日實業」は、大正二年三月、大總統を辭して當時中華民國全國鐵路總辦であつた孫文氏が來朝し、澁澤子爵と會見、談偶々日華兩國の經濟聯絡並に中國における富源開發のことに及び、これが具現として日華兩國實業界有力者によつて發起され、唯一つの日華兩國の法人格を有する公社として設立されたのであつた。

創立後間もなく、大總統袁世凱の陰險なる壓迫に憤慨せる孫文氏は政争の渦中に捲き込まれ、

物情騒然として中國側の準備に頓挫を來し、「中日實業」の立場は甚だ苦況に置かれたのであつた。たゞ幸に澁澤子爵が會社の國家的使命と日華關係の重要性に鑑みて刻苦畫策、兎も角その基礎を確立したのであつた。同年五月十八日子爵が孫文氏に寄せた書翰を一讀すれば、當時の政情や、「中日實業」の日華兩國經濟界における地位並にその使命及びこれが創立に關する澁澤子爵の報國の熱意を覗ふに足ることが出来るのである。今その書翰を摘記すると、次の如くである。

(前略) 貴國政局の現状は、誠に憂慮に堪へず、貴豪は天資英明頗る時務に通じ居られ候故東亞の大局に顧み宜しく隱忍自重終局の勝利を獲ることに力められ度、南北の主義相反せるは氷炭も管ならざれ共その争ふや立憲的行動に出ることは已むを得ざる處に候今南方の準備未だ完成の域に達せざるに激情の餘り北方の誘致する所となり、大局決裂し砲火を交ゆることゝなれば國民塗炭の苦を享くるのみならず、時局は益々紛糾し列國をして通商保護に藉口し國政に干渉し、或は領土分割の端を啓くことゝなり、其極東亞の大亂となり影響する所至大なるべきは贅言を要せず、萬一にも斯る事態の發生せば其主義政見が如何に善美なりとも恐らく之を施す所なき次第なれば何卒鄙見を諒とせられ、十分心神を冷靜に持たれ深謀遠慮必ず輕擧して他の術策に陥らざるや専ら東洋平和と同種保持を目的として、一箇の忍字を大切に守り靜かに時期の至るを待たれ度く其時期は決して悠遠のものに有之間數候昔張公藝は帝の下間に對し百箇の忍字を書し奉答せりと申傳候、今老生も忍字を以て貴臺に進め候間何卒等閑視せられ間數候、貴國の政争は貴

國內部のことゝは申せ東亞の全局に關するのみならず、世界の大局に至大の影響を及ぼす可候間十分御考慮相煩度御懇意の間柄なれば鄙見を述べ忠言を呈し候事老生の義務なりと相信し申候

中國興業公司(中日實業の前身)に就きては去る二十六日電報にて一切の事情申進候通日本側發起人の引受株數は全部確定し立替金に就ても承諾を得候、而して日本側株主は有力實業家の全部を網羅致候爲株式の割當等に種々なる事情あり爲に遅延致候、代表者派遣は大に相後れ誠に遺憾に存候多分來月初旬全部決定し、同二十日前後には代表出發のことゝ可相成候、回顧すれば本年三月貴臺と中國興業公司創立の御相談致候てより既に三閱月、此間多少の曲折を見候へ共全體より見て好成績に有之候は相互の誠意を見るに足り東亞百年の大計の爲め欣慰措く能はざる所に御座候何卒爲國家御自愛專一願上候 勿々不具

孫中山先生

澁澤榮一

以上の尺牘に見るも判る通り、「中日實業」は全く日華經濟提携を具現した國策會社であり、これが確立について、如何に澁澤子爵が鏤骨碎身したかを察することが出来るのである。

次いで澁澤子爵は時の大總統袁世凱氏から渡華を希望し來りたる等のこともあつて、旁々「中日實業」の基礎を確立するため翌年五月二日東京出發渡華、中國各方面と親しく折衝し、「中日實業」の基礎を固めたのであつた。

然るに斯かる國策遂行の重大使命を持つた「中日實業」が創立後數年ならずして行詰りに陥つ

たのであるから、國家のため洵に惜しいといふので、關係各方面に何とかせねばならぬといふ議が起つた。そこで會社關係の財界代表者と政府側との間に、これが更生策について折衝が行はれることゝなつたのであるが、その時の財界側代表者として最も盡力されたのは、實に澁澤子爵と郷さんと和田豊治氏であつたのである。

殊に郷さんは、澁澤子爵存命中その意を受けて大いに奔走したばかりでなく、子爵なき後は専らその衣鉢を受けついで、わが國策遂行のため「中日實業」の更生發展に並々ならぬ努力を拂はれたのであつた。

即ち「中日實業」は、日華經濟提携具現の使命に鑑み、その日本側株主としては三井、三菱其他各有力銀行を初め財界各分野を網羅し、相談役には錚々たる財界有力者の名を連ねて居たのであつた。従つてこれが更生については、皆それぞれの立場において協力したことは勿論であるが、會社のため専らその衝に當つたのは、澁澤子爵、郷男爵、和田豊治氏の三氏であり、和田氏は途中他界されたので、實際は澁澤子爵と郷さんとが、主として之に當つた譯である。

殊に、郷さんは非常に熱心に更生策を検討され、相談役會等でも、いつも眞先に發言して會議を圓滿に指導したのであつた。そしてこの更生計畫立案を繞り、郷さんについて、自分の最

も敬服したことは、計數について極めて明るく、又綿密であるといふことであつた。

即ち大正十一年十一月自分は「中日實業」の整理を引受くることゝなつたのであるが、郷さんはその間に會社の貸借對照表を子細に検討し、細部に互つてまで研究され、一目瞭然、實にキチンとした資産表を作成して自分に引繼いでくれたのであつた。その出來上つた資産表を見て、郷さんの緻密なる頭腦に對し、自分はたゞ々々敬服する外はなかつたのである。

周知の如く、郷さんは、明治十七年ドイツに留學し、ドイツ式の教育を受けて居られるので、自然物事を理論的に判斷するやうに習慣づけられたのだと云へば、或はさうかも知れないが、それにしても、郷さんの計數に對するこの鋭敏さと、その計數を基礎とする緻密にして適切な判斷力とは確に天稟の才と云ふべきであらう。錯雜な財界の諸問題處理に、往くとして可ならざるなき、あの優れた手腕を縦横に發揮されたのも、後述する如く、「私」がなかつたことゝか、その立場がよかつたことゝか云ふ以外に、かうした計數に明るく正しい判斷力を持つてゐたといふことが、人々を承服させ、郷さんの意見に従はざるを得ざらしめた一つの大きな力となつたと思ふのである。

ところで、當時「中日實業」は何分五百萬圓の拂込資本に對して、九百萬圓の缺損といふ始

末であつた。かう云ふ状態の下にあつて會社の更生を圖るには到底財界人のみの力を以てしては不可能である。會社創立の使命に顧み、國策會社として政府も相當力を入れてくれるのである。ければ所期の目的を達し難いのは當然である。そこで澁澤子爵と共に郷さんは政府側に對し事情を具し熱心に運動したのであつた。當時内閣は加藤友三郎内閣で大藏大臣は市來乙彦氏、司法大臣は岡野敬次郎氏、書記官長は宮田光雄氏であつた。又直接の關係があつた理財局長は小野義一氏、國庫課長は富田勇太郎氏であり、元藏相の青木一男氏が國庫課の事務官であつた。

そして政府側も澁澤子爵や郷さんの意見に傾聽され、岡野法相が政府側の内部に在つてこれを援けられ、「中日實業」の更生計畫を樹てたのであつた。かくして「中日實業」の更生の基礎が確立されたのであつたが、其後も引續き郷さんは澁澤子爵を援けて會社のために骨身を惜しまず盡力され、澁澤子爵も亦何事につけても郷さんの意見を徴されて、會社を援けてくれたのであつた。即ち澁澤子爵は常に自分に對し、萬事郷さんに相談するやうにと申されて居つた位で、大事な問題になると、必ず郷さんの立會を求めるといつた次第であつた。

その一例として、大正十三年芳澤駐支公使と會社の問題で打合はせることになつた時、澁澤子爵から自分に寄せられた書翰が残つてゐるが——中日實業東京本店に書翰全文を寫眞に撮り

額にしてある。——その書翰には次の如く、澁澤子爵の郷さんに對する信頼の程が言外に溢れてゐるのである。

澁澤子爵からの來翰(大正十三年八月十三日)

貴方十七日の御細書昨日落手拜見いたし候過日當地尊來之節種々御協議致候貴會社の現状外務當局もしくは内閣首班に詳細に具陳して將來の計畫を考定するには是非とも第一に芳澤公使に充分事情を開陳してその内示を得る必要有之事と存候旨縷々の愚見貴臺より公使へ御申通相成公使も充分了解せられ、早々老生と會見の事御同意被下候趣貴翰にても拜承、公使よりも丁寧に當方へ回答有之候就ては老生は二十五日には當地を引揚げ無相違歸京可致に付來る八月二十六日正午に於て銀行集會所に御會同相願度候間貴臺より其段公使へ御申上被下御來會被下度候、當日は勿論貴臺も共に公使と會同致度と存候も春田氏(註、當時中日實業專務取締役)は如何に候哉是は貴案に任せ候間可然御取究可被下候、但午餐の用意は老生方にて可申付候間白石喜太郎(註、現澁澤同族株式會社專務取締役)へ申付置候に付御打合可被下萬一銀行俱樂部に差支有之候は、弊事務所相願度候に付是又公使へ御許容の程可然御申上可被下候

此會合に付ては郷男爵は如何可致哉御一考被下度老生は可成會同相望候へ共公使に於て餘りに公開的と御思考被下候てはとも相考しにより特に書中御相談仕候、貴案郷男の會同御望に候はば早々に御交渉當日出席被成候様御取計可被下候、右尊翰拜答旁々公使へも御傳言相願候爲め早々如此御座候 拜具

八月十九日

伊香保客舎に於て 澁澤榮一

高木陸郎様

貴酬

郷男爵を悼む

芳澤公使へは老生よりは別に書通不仕候に付貴臺可然御申上可被下候也

尙々老生は来る廿五日午後には無相違歸京可仕候に付其旨申上置候、而して廿六日正午の御會合は事務所白石へも申遣置候に付老生歸京前にも同人より御打合可申と存じ爲念申添候也

以上の如くであつて、澁澤子爵が重要な會合等には、常に郷さんにも立會つて戴くやうにしてゐた氣持の一端が、よく現れてゐるのである。

そして子爵は昭和六年十一月逝かれたのであつたが、その年の三月、銀行集會所における「中日實業」の總會に出席された時——それが子爵が「中日實業」の總會に出席された最後となつたのであつたが——子爵は、それとなく郷さんに後事を託されたのであつた。そんな譯で私は澁澤子爵亡き後は一層郷さんの御厄介になること多く、會社の人事問題などもすべて郷さんに御相談申上げる等、何から何までその教へを乞うたやうな次第であつて、曩に澁澤子爵逝かれ、次いで郷さんを失つて私としては、本當に萬事を打ち明けて御相談申上げ教へを乞ふ先輩なく、沁々寂寥を感じてゐる次第である。

さて、私は前にも述べたやうに、「中日實業」を引受けた翌大正十二年三月、會社整理のため北京に行き、暮の十二月に歸つたのであつたが、歸京匆々郷さんを訪ねたのであつた。郷さんは

その年の大震災當時箱根宮の下の別荘に居られ、折悪しく建物が倒潰したのであつた。幸にして郷さんの體には別條はなかつたが、その時郷さんは

「幸にして命が助かつたのである。これからの一生は拾ひものであるから、餘生は國家に捧げ中國問題解決のために微力を盡さう。」

との固い決意をされたとのことで、自分が訪ねて行くと、そのことを話されたのであつた。かくして、それから以後といふものは、單に「中日實業」の關係からばかりでなく、中國關係者としての自分と、中國問題研究者としての郷さんとの間は、何かと一層強く深く結ばれたのであつた。そしていろいろな機會に、いろ／＼な問題で、番町の本邸は勿論、箱根や鎌倉の別荘、さては赤坂の別邸などにも伺つて、いつも餘人を交へず、時には食事を共にしながら、二、三時間乃至は四、五時間の長きに亙つて話合つたものである。殊に郷さんが昭和十二年十月内閣參議となつてからは、常に中國問題についていろ／＼と意見を徴され、自然話題は「中日實業」のことよりも中國問題のことが多く、中國の動き、日本側のとるべき態度等につき屢々自分の見る所を率直に開陳し、郷さんの参考に供したのであつた。

自分が郷さんを知るやうになつてから、郷さんが亡くなられるまでの關係は大體以上の如く

であるが、かうした郷さんとの接觸において、自分の最も感じたことや、郷さんの偉大な人格の思出をひろつて見よう。

郷さんは「中日實業」の中國側重役などが來朝すると、よく自邸に招き私費を投じてこれらの人々を歡待などして、會社のため、延いては國策遂行のため、全く打算を超越して盡力してくれたのであつた。これらの點は名實共に澁澤子爵の衣鉢を繼いだものと云ふべきであつて、一身の利害を離れて「中日實業」のために盡した努力に對しては、會社關係者としてのみならず、一國民としても衷心感謝に堪へぬ所であるが、會社は整理時代のことゝて、郷さんのかゝる御盡力に對して何一つ御禮することが出来ない。

そこで私は、私としての御禮心から中國人から贈られた堆朱のお盆があつたので、これを郷さんに差上げたのであつた。このお盆は、自分が曾て中國にあつて奉直戰後、直隸省冀東地區の前内務總長張志譚氏の財産を保護してやつたことから、張氏母堂から御禮として贈られた由緒あるものである。「せい／＼五十圓か百圓のものかも知れませぬが、贈り主が贈り主であり、相當のものかも知れませぬ。是非お納めを願ひたい」と郷さんに差上げると、郷さんは「からしたものを贈られても困る」と云つて、なか／＼受取つてくれぬ。自分は「貰ひ物ではあるし、

私が持つて居ても仕方がないから……」と強ひてお納め願つたのであつた。

ところが郷さんは、それを出入りの骨董屋に見せたのであつた。すると案外上等のものらしく、當時不景氣時代でも時價二、三千圓はするもので、少し景氣のいゝ時は四、五千圓はする代物であるとか。その次に私が訪ねて行くと、郷さんはその話をされ「こんな立派なものを貰つては困るから返す」と云つて持ち出して來た。

「果してそれ程立派なものかどうかは知らないが、既にお納め願つたのだから是非受取つて戴きたい。第一私の所に置いて見た所で、誰もそれ程のものとは見て呉れない。」

と、たつてお納め願つたのである。すると郷さんは漢玉の立派な勾玉を取り出して來て

「これはいゝものではないが、五百圓程で買つたものだ。これを上げるから兎も角受取つて呉れ。」

と、それを自分に寄越したのであつた。

ところが更にその次に訪ねると、翡翠のカフス釦を取り出して來て、「これは三越で作らせたものだ」と自分に差出された。そこで自分は「いろ／＼御世話になるばかりで、會社として何一つ御禮も出來ず相濟まぬと思つてゐるのです。せめて自分の御禮心として、他からの貰ひ物

があつたので、これを差上げたまでに過ぎないのに、かうした御返しを受けては却つて恐縮の外はないから……」と飽迄謝辭すると、郷さんは「これは自分と君とのために、他に一寸類の無い良質であるから特に三越に命じて作らせたのだから、辭退されては困る」と云つてきかなかつたのである。

以上、いさゝか私事のやうであるが、この経緯において、私の沁々感じたことは、郷さんの全く「私」なき國家奉仕の高潔なる心事である。郷さんが「中日實業」のために盡して呉れた功績は、到底筆紙にはつくせぬものがある。しかも郷さんは全く國家のためといふ信念の下に、この厄介な仕事を引受けて居られたのであつた。即ち郷さんが、自分のさゝやかな贈物に對し何處までもこれを辭退しようとし、辭退し兼ねるやその返禮をしたといふことは、單に義理固いといふのではないのである。自己の使命として爲したことについては、爲すべき當然のことを爲したまでとなし、そこに何等求むるの心がないのである。

實に、郷さんは常に國家の高きに居つたのである。所謂財界世話役として屢々厄介な問題の處理に當つたのであるが、それは國家のために信すればこそこれを引受けてゐたのであつて、そこには微塵も利己的な打算とか、報酬といふ反對給付を目的とするとか云つたやうな「私」

の氣持ちはなかつたのである。兎もすれば御禮を強要しようとするものさへある世の中に、全くの無報酬で骨身を惜しまずに盡力し、しかもその御禮すら辭退しようとする氣持ちには、全くたゞ敬服させられたのであつた。

郷さんが財界の統率者として稀に觀る優れた手腕を發揮されたその根本は、實に郷さんに「私」といふものが全く無かつたといふ點であらう。「私」がないから「私心」なく、「私心」がないから「私利」を追はず、「私慾」に濁らず、自然その判斷や述べる所は公正妥當であつて、何人と雖も郷さんの意見を承服せざるを得なかつたのである。

郷さんの正を履んでおそれぬ烈々たる氣魄も、その内心に一切の「私」的の影がなかつたればこそである。嘗て大正十五年に自分が中華民國から我國の勳一等に相當する一等大綬嘉禾章を授けられた時、郷さんは祝辭を述べ、笑ひ乍ら

「私には、そんな立派な勳章はないが、私の強味は天下何人にも恐れる所がないことだ。」と云つたことがあるが、當時郷さんの如き財界の最高峰に在る人であつても勳三等であつた。それ程正を履んでおそれぬ氣魄を持つて居たのである。

尤もこの信念に忠實にして、何物にもおそれぬ氣魄は幼時からの郷さんの資質らしく、小さい

時、よく近所の子供などを泣かせ、嚴父の郷純造男が庭の樹に郷さんを縛りつけて折檻し、「あやまれ」と云はれても、郷さんは、自分で正しいと信ずる限り、何としてもあやまらなかつたとか。嚴父が「困つた子供だ」と、時々迷懐したものだと言ふ。

さて財界における郷さんの立場は、財界各勢力の均衡の頂點に立つてゐたかの觀があつた。かゝる有利な立場は餘人には到底求め難いところであつた。といふのは嚴父郷純造男爵は、松方藏相の下に次官を勧めて居た關係で嚴父を通し、又は松方さんとの因縁からもとゞ、財界各方面に特別の連絡があつたのみならず、令弟は岩崎彌太郎氏から懇望されて岩崎家の養子になつて居り、岩崎家とは姻戚關係にある。曾て豊川良平氏が或る會合の席上で、「郷君」と云つたので、「主人筋の自分に對し、郷君とは何事だ」と云つて、席を蹴つて歸つたと云ふ有名な逸話さへあるのである。

又、令妹は川崎八右衛門氏に嫁いで居り、三井とも亦事業上其他いろ／＼と深い關係を持つて居たのである。従つて所謂一黨一派に偏することがない。そして又財界の諸勢力に平等に睨みがきいたのである。しかも自分自身も親から譲られた相當の財産を持つて居り、その上前に述べたやうに全く「私心」がないのであるから、財界統率者として、郷さん程好條件を備へた

人はなかつた譯であつて、恐らく將來、日本の財界にかうした適任者を求むることは到底不可能ではあるまいか。

最後に私人としての郷さんは、非常に多趣味の方で、忙中閑を得て悠々鳥鷺も鬪はすし、盆裁書畫、骨董にも一見識を持つて居られたが、就中建築については特に趣味を持たれ、一生の中に十八、九軒の住宅を建てたと云はれ、箱根や鎌倉や伊豆山の別荘など屢々拜見する機會を得たが、誠に數寄を凝らしたものであつた。又、郷さんの時間の正確なのは有名なもので、實に几帳面であつた。十時と云へば、必ず正十時である。遅れてはもう御目にかゝれなくなる。その代り約束の時間に行けば待たせられるといふことがなかつた。自分は六時、二分前に行くやうにして居たものである。

以上、私が郷さんに接した印象を、とりとめもなく述べた次第であるが、一言以て評すれば洵に得難き偉材であつたといふことである。明治、大正、昭和の三代に互つて、わが財界の指導者としては澁澤子爵あり、郷さんがあつた。

澁澤子爵は何處までも徳の人であり、その徳の力を以て諸事圓滿に纏めて行つたのであるが、郷さんは徳の人であると共に力の人であつた。さうして計數に明るく、萬事理論的に處理

して、そこに一片の「私」が無かつた。しかも財界各勢力に對し一様の繋がりや睨みとを持つてゐた。郷さんが複雑にして、利害關係に敏感な財界をよく國策の嚮ふところに纏めて行つたあの鮮かな統率振りを回顧するとき、眞に得難い人材であつたことを沁々思ふのである。

今日、大和民族一大飛躍の時運に際會し、八紘爲宇の一大經綸を四海に布かんとするに當り、郷さんのやうな高邁な識見と、優れた手腕力量とを持つ財界指導者のないことは、國家のため全く痛惜に堪へぬ所である。洵に郷さんのやうな人材の再現を待望するや切なるものがあるが、果して今後名實共に郷さんの後繼者たるの人物が出現するや否や？

これを私一個の立場から云つても、安心して何事も打ち明け相談出来る郷さんのやうな先輩は容易に求め難いのであつて、誠に郷さん亡き後、暗夜獨行の感深きものがある。蓋しそれはひとり私のみの感懐ではあるまい。恐らく郷さんと直接交渉を持つた程の人達は、誰もが懐く感慨であらう。こゝにわが財界の偉材郷さんを偲び、生前「中日實業」に残した功績に對し衷心感謝を捧げ、追憶の心を寄する次第である。

望月圭介・森恪・僕

明治四十年頃のこと、私が漢口の三井物産時代であるが、屢々日本へ歸つて來た。湖北省官錢局の高松如君を帶同して、我が印刷局に支那の紙幣印刷方交渉に來たのも其の二つであつた。内閣書記官長石渡敏一君（石渡前藏相の嚴父）を通じて、西園寺首相に面談し、支那問題を説明したのも此の頃であつた。

當時、私の定宿は築地の有明館であつたが、何分にも年少氣銳の、然も東奔西走に興味を覺えた得意時代でもあるので、勢ひ事務談合の必要から狹斜の巷へ出入することも尠くなかつたので、私の健康上のことなど心配して呉れた森作太郎翁（故森恪の嚴父）が、氣分の轉換策として、何か特別の内藝を研究するやうに勧め、偶々清元梅吉を紹介して呉れた。これから私の清元研究が始められたもので、考へれば私の清元も相當年代物であるが、相變らずの未完成は汗顔の至りである。

そこで一寸、森作太郎翁のことに觸れて見たい。もとゞ森恪と私とは、少年時代共に中國

に學び、三井物産に俱に働き、然も中國を舞臺に大いに風雲を望まんとを契ひ合つた青春時代からの親友で、彼との友情は彼と相別るゝまで少しも變らずに續けられたことは勿論である。ところが奇しくも彼と私とは血族的に恵まれない運命にあつて、相互に少年時代、彼は母を私は父を喪つて、母の愛と父の愛とに渴した氣分に育まれてゐたものだから、其の物語を語り合つてから、彼の父を私も父と親しみ、私の母を彼も母と懐しむことを約束し、爾來、父と母とを交換して、お互に父性愛、母性愛の實現満足を楽しんだもので、森恪は其の死の最後まで、だから私の母を母と慕ひ懐しんでゐたものである。

斯うした關係で、森作太郎翁は森恪の父であると同時に、また私の父でもあつたので、私の健康を人並以上に心配され、斯くして清元梅吉紹介とまでなつたわけであるが、森作太郎翁の考へでは、「藝術を、然も一流の師匠に指導をうけることになれば、常人も比較的眞劍にならざるを得ないであらうし、それよりも更に、一流の師匠に師事してゐるとなると、酒宴に侍べる美形連も自ら一流どころが集まるといふことになるから、従つて健康上にも得策だ」といふ頗る遠大な愛情からの計畫であつたのである。

私が梅吉の手ほどきをされ出すと、凝り性な私の、しかも若い負け嫌ひの時であるから、稽

古も熱心だし、夢中になつて其の道への前進につとめたものだが、偶々その頃、すつと有明館を根城にしてとぐろを巻いてゐたのが、代議士望月圭介君であつた。宿舍が同じであつたといふ關係ばかりでなく、清元梅吉師匠の許へ、やはり熱心に通つてゐた門弟の一人に望月君を見出したといふこと、つまり同宿、同門といふ因縁淺からぬ間柄であることが、必然的に望月君と私との友好を温める楔となつたのは勿論であつて、また望月君の人柄が、まだ政治家としては下積みの燻つてゐた時代であつたが、何となく懐しみ易い風格があつたものだから、いつとはなしに清元を通じて、身近な感じを覚えるほど親しむやうになつたものである。

さうした關係は、同好の士といふ、なごやかな氣風のうちに親睦を深めることとなり、望月君と同僚の代議士であつた三浦逸平(愛知)君や菊池武徳(青森)君などもよく一緒に集まり、天狗の鳴き合せをやつたものであつた。

大正二年の頃であつた。私の大井の宅へやつて來られて、私の母に聽かすために清元を語つて行つたことがある。尤も當時選舉を控へて選舉費の話なども多少あつたのであるが、それにしても、清元に於ける君の感觸は流石に、後年人情大臣と囃されるほどあつて、柔かく且つひたぶるな半面をその頃から俵げせるものがあつたのを想起する次第である。

其の後、昭和十四、五年頃には望月君も小唄の途に新しい趣味を見出して、同じ嗜好の境にあつた私と築地の「きん楽」あたりで催された小唄の會などに、屢々顔を合はすことがあつた。君が靜かな、そして分別らしい性格に雅味の多かつたのは、どうも、この清元とか小唄とかいふやうな大和藝からの影響が多分にあつたからだと思はれる。

是より先き、昭和二年四月、田中義一内閣の成立するや君は逓信大臣に親任された。望月君が政治家として多年の経験と閱歷に表面的な物を云はせたのは此の時からで、後に内務大臣に轉じ、更に後年岡田啓介内閣に再び逓信大臣となつて、政界の長老的存在を明かにしたのも、其の發端は田中内閣の逓信大臣時代にあつたと云つてもよからう。即ち一面人情大臣と稱されて、政友會内部と一般政界とに一種の必要な地位を持つ存在であつたと同時に、この人情大臣は單なる人情大臣ではなく、或は私かに大陸問題等に多大の興味と希望とを抱いてゐたもので私の關する限り、次のやうな事柄に就いて、望月逓信大臣の活眼に畏敬の念を抱かせられたことがあるのである。

それは昭和二年七月のことである。久しく支那黄河の航運事業創立に就いて研究を續けてゐた林重次郎君の提唱に照應して、一は大黄河の航運事業創始といふが如きとは單なる營利企業

ではなく、對華政策上から云つても政治經濟上に一新生面を開くものであり、同時に所謂日華親善の實を具體化する合作事業でもあるから、是非とも中國側との合作計畫によつて、黄河全域（と云つても黄河河口から山東、河北、河南、山西の各省平原を横斷して、陝西省潼關に至る七百哩の延長を目標とする）に互る發動機船運航による航行權を獲得し、之れを實踐化しよらとの考へであつた。

尤も之れよりさきに、この黄河航運の問題に就いては、時の青島軍司令部民政長官秋山雅之介博士も非常な乗り氣で、その指導の下に七年間を費して漸く前記の航行權を獲得したといふ事情もあるので、相當重要な仕事でもあつたのである。

それで此の事業を創始するに當つては、國策的見地から言つても、政府の補助を受くる必要がある次第であるから、昭和二年七月十三日附を以て秋山雅之介、高木陸郎、倉知鐵吉の三名が出願人總代となり、「支那黄河運漕業創始に付補助金下付請願書」といふものを政府に提出したのであるが、當時の當局者は逓信大臣たる望月圭介君であつた。

實際、黄河の航運といふやうな問題になると、事が餘りに遠大な、そして經濟的には大乗的に考へさせてしまふやうな事柄であるから、餘程對華經濟事情に精通してゐる者でもなければ

容易に呑み込めるものではないのだが、望月君は頗る端的に此の問題を諒承し、若干の補助金支出の如きも快よく之れを容認して呉れたのである。しかしそれが具體的に取運ばれないうちに、内閣が更迭して逓信大臣も代るといふやうなわけで、遂に黄河航行のことは實現を見るに至らなかつたことは、今思ひ出しても残念至極なことである。

政友會が分裂して、中島派、久原派と兩立の姿にあつたことは、吾々門外漢から見ても決して妥當だとは考へられなかつた。唯、政治は生き物であつて、進歩の早いものだといふ原則からすれば、一つの政黨が時に分裂し、時に合流するものも已むを得ない理數かも知れない。

それはさておき、望月君は晩年、中島派の政友會に屬してゐたが、その頃私が同君と相接觸したのは、中島知久平君を中心として結成された東亞國策研究會での集まりの時であつた。望月君が同研究會の顧問であり、私が副理事長であつた關係からである。

東亞國策研究會に私が引出されたにもいろ／＼な経緯があつて、顧問に望月君が居つたといふことも私の心を動かした理由の一つではあるが、理事長たる堀切善兵衛君の眞剣さや、中島知久平君の人柄などに魅せられたのも他の一つの理由に數へることが出来るであらう。

x

x

中島君に就いては私は餘りよくは知らなかつたのであるが、山本策太郎翁逝去の直前、山本宅に於て眞に友情を披瀝した態度には全く打たれるものがあつて、私はひそかに其の日以來、中島君の人柄を畏敬してゐた。その中島君が國政一新會を組織したとがあるが、そのメンバーには、私が常に親交を結んでゐる藤沼庄平、船田中、太田正孝などの諸君が居つたので、中島君を取圍む一連の人達に親しみ得る感情を持つやうになつてゐた。

さういふ感情を懐いてゐる際に、中島君を中心とする東亞國策研究會が結成された。然も理事長に堀切善兵衛君が就任するといふし、副理事長に清瀬一郎君と山道襄一君と私をといふことで、堀切君から勧誘されて、辭退し切れないものがあつたものである。

堀切善兵衛君に就いても、私は令弟善次郎君とは舊知の間柄で、日本俱樂部や國策研究會などで屢々顔を合はしてゐたけれども、令兄善兵衛君の方は餘り直接相識る機會がなく、未知のまゝであつたのだが、事變以來、雜誌社などで中國を組上にする座談會を催した場合、星ヶ岡茶寮や、赤坂の「あかね」などで、二度ばかり堀切君と同席したことがある。

ところが座談會に於ける堀切君の意見といふものは非常に率直であり、また極めて徹底した強い信念的なものであつたので、私は堀切君といふ人の對華意見には多分に傾聴すべきものゝ

あることを座談會の都度痛感させられたのであつた。この堀切君から國策研究會の副理事長就任方を慫慂されたので、拒否する理由も持てず、これをお引受けしたやうな次第であるが、同會で私は時折、望月君と相會することのあつたのが最近の思ひ出であらう。

望月君と最後に會見したのは昨昭和十五年一、二月頃、米内内閣の參議の職にあつた時である。同君は參議として中國問題に多大の關心を持つてゐるといふことで、特に日華問題を檢討論議するため、一夕原宿の同君の邸に招かれ、二人限りで會食して夜十時過ぎまで語り合つたことがある。實際同君は、一寸他人には意想外に思ふほど中國問題——大陸のことに強い關心を持つてゐたもので、日本外交協會の講演會などには、寸暇を割いて出席し、熱心に傾聴してゐる姿を随分と見受けたことである。

顧みれば望月君と私との關係は三十餘年の久しい交りであるが、しかも其の親交は、決して政治的な因縁を持たない、誠に坦々たる交りであつた。否坦々といふよりも、趣味的な風がはりな懐しさの交りであつたと云ひ得るのではなからうか。蓋し同君と私との永い交誼といふものは、打算を離れた、利害に超越した、つまり、趣味が似通つたといふところに、結び目があつたのぢやなからうかと追憶されることである。

惜しむらくは、私は昨年五月發病以來、今日なほ病後靜養の身の上であるがために、望月君の晩年を、趣味を以て語り合ふといふやうな機會に導き得なかつたこと、それが今でも遺憾に思はれてならない。そして清元、小唄を通じての、君のあの聲貌、そして最後に時局を談じ合つた時のアノ眞剣な眉宇、聲貌を偲ばれてならないのである。

(昭和十六年)

裙下の酔

宋家出三妖
麗粉迷當朝
君臣裙下酔
國土化成焦

「國亂れて落首あり」で曩頃、中國の一新聞にこんな投書が掲載されてゐた。

宋家の三妖とは、云ふまでもなく宋家の長女たる宋藹齡、次女の宋慶齡、三女の宋美齡を指すのである。

藹齡は、人も知る如く重慶の勝手元を預る孔祥熙の夫人で、夫と共に米英の猶太財閥と結託し、國を賣つて私腹を肥すに汲々たる有様である。慶齡は、故孫文の未亡人であるといふよりは、現在では中國共產黨に隱然たる勢力を持ち、これを操つてゐることにありてあまりにも有名である。美齡は、蒋介石夫人であると同時に、蔣と米英との取持ち役として亡國の曉を告ぐる牝鷄たることにおいて天下に著聞してゐることは、茲に説明するまでもあるまい。

今も昔も、麗粉は城を傾け、國を傾ける。宋家の三妖は、黄金魔、思想魔、權力魔の同義語

でもあらう。災なる哉三妖裙下の重慶要人、三妖の一顰一笑に一路焦土へと噴火山上に亂舞させられてゐる譯である。

曾ては、その師父たる孫文と共に中國の解放、東亞の保衛に革命の血をたぎらせた蒋介石であつた。そして又、孫文の徹底的英國嫌ひは誰知らぬ者なき彼の信條である。前歐洲大戰において、日本が日英同盟の義により英國側に加擔したことを痛惜したのも孫文であつた。又、中國が聯合國側に立つて前歐洲大戰に参加せんとするや猛然反對したのも孫文であつた。孫文とつて、全く俱に天を戴くことの出来ぬ英國ではなかつたか。その師父の志、信條を誰よりもよく知悉して居りながら之を裏切つてゐるのである。そして、英米に媚態の限りをつくし、矛を内に向けて、保衛すべかりし東亞を彼自ら攪亂し、解放すべかりし中國を彼自ら奴隸たらしめんとしてゐるのが蒋介石今日の爲態である。彼に一片耿々の良心あらば、半夜夢醒めての感慨、果して如何であらうか。彼の偽らざる胸奥の本音を聴きたいのは私一人のみではあるまい。わが崇高なる八紘爲宇の理念を解するによしなく、彼は日本の言ふ所を口先のみとなし、日本の爲す所を以て侵略の假面なりとして、無智な民衆を抗日戦に踊らして來たのである。

近衛原則も、作戦中において直ちにこれを實行に移すことの不可能なることは當然の事であ

る。この過程的の一時的事象を以て、日本の眞意を曲解、妄斷したところに、彼の第一歩における過誤があつたのである。

しかし、わが近衛聲明以來の一貫せる對華方針は、決して欺瞞でもなければ、單なる思ひ付きでもない。日本の率直なる信念であり、且つ現實の經綸なのである。日華基本條約となつて具現し、今度の租界返還、治外法權撤廢によつて結實したこの事實は如何に猜疑心を以て見るとも、一點疑ふことの出來ぬ現實ではないか。彼が、支那事變の當初においては、日本の眞意を解し兼ねたといふことは恕すべしとするも、今日となつて尙醒めぬといふことは、何としても解するに出來ぬのである。中國には君子豹變といふ言葉があるではないか、中國の先哲は過ちを改むるに大悟一番すべきことを教へてゐるのである。彼、聖賢の教へを知らず、過誤と知りつゝなほ過ちを強行するは、全く行掛りの我執以外の何ものでもあるまい。

日本が、世界の二大強國を對手として敢然大東亞戰爭に起ち上つたことは、八紘爲宇のわが民族的信念に生きんがためである。英米の次植民地として、その壓制下に蟄息せんとしてゐた東亞の民を解放せんがためであることは、今度の議會で、東條首相がビルマの獨立を確約し、比島獨立への期待を表明した一事によつても既に明瞭である。

蔣介石としては、或は米英との腐れ縁に、泥田に踏み入れた足を抜くことが出來ぬとするも、重慶要人中には、猶良心を失はず東亞人たるの自覺を忘れぬ人士も居る筈である。殊に、私の知つてゐる範圍においても、彼等の中にはわが明治維新史を研究し、日本の本當の姿を知つてゐる者も尠くない筈である。

日本が肇國以來悠久三千年、國礎愈々固く、天壤と共に窮まりなき所以のものは何か。畏れ多くも、一天萬乘の 陛下の下、八紘を掩ひて宇となさんとする大愛を信條とし、常に信義を以て立ち、常に世界平和を祈念し來つたればこそである。未だ曾て英米的の利己主義や功利主義乃至は搾取や侵略に墮したことがなかつたればこそである。しかもそれは、作爲や政略的に然るのではなく、全く日本の肚の底からの信條によるのであり、今後も變ることなき日本の大道なのである。少しでも日本の實體を研究すれば、一點疑ひのない日本の姿なのである。

成程、日本は過去において、日清戰爭を戦ひ、日露戰爭を戦つた。しかし、畏れ多くも明治大帝は明治三十七年「正述心緒」との御題において

よもの海みなはらからと思ふ世に

など波風のたちさはくらむ

と御製あらせられてゐるのである。これこそ「正に心緒を述べ」給うた大御心である。日露戦争中においてこの御製を拜す。日本が何故の對露開戦であつたか極めて明瞭ではないか。當時、帝大の一外人講師がこの御製を英語に謹譯して世界各国の主権者におくつたところ、當時の米大統領ルーズベルト（現ルーズベルトの伯父）が拜讀して、いたく心を動かされたと言はれてゐる。それから三十餘年の今日、日本は米國に對して干戈をとつたのであるが、そのこゝに至つた所以は對露開戦の場合と全く同じく、たゞ一つに東洋平和を祈念し、世界平和を庶幾せんとする以外の何ものでもないことは大詔において炳として明らかなるところである。今日、甥のルーズベルト之を解せず、洵に嘆すべき哉である。

又、同じ明治三十七年に 明治大帝は

仁

國のためあだなす仇はくたくとも

いつくしむべき事な忘れそ

とも仰せられ、明治四十二年の御製には

仁

いつくしみあまねかりせばもろこしの

野にふす虎もなつかざらめや

とも仰せられてゐるのである。更に 昭憲皇太后陛下は

淺きとてせけばあふるる川水の

心や民の心なるらん

と詠ませ給うてゐる。

畏れ多くも、これらの御製、御歌によつて拜察する大御心は、その昔、神功皇后が三韓征伐に當り下し給うた軍令に

「其敵少くともな輕りそ、敵強くとも屈ぢそ、則ち奸暴をばな聽しそ、自らに服はむをな殺しそ」

と仰せられたと同じ大御心である。

大御心は、三千年の昔から奸暴は斷じて許し給はぬと同時に、どこまでもあふるゝ御仁愛であらせらるゝのである。そして、その大御心のまに／＼み民われ等亦民族的信念に強く強く結ばれて、この肇國以來の皇國の道を奉行し奉つてゐるのである。即ち、われ等の道は二宮尊徳

翁の所謂「國家を富實せしめ、萬姓を濟救せんが爲」であつて、日本の行ふところが常に最高の道徳であり、最強の信念である所以である。

これが悠久三千年の日本の眞姿であり、日本人本然の姿なのである。かゝる日本の本態を理
解出來すしてか、或は又理解しながら敢て耳を覆ひ眼を隠してか、理據なき抗日を叫び、國土
を化して焦土となさんとする彼等に對し、兄弟國としての我等は何としても涙なきを得ないの
である。速かに裙下の醉より醒めんことを祈つてやまない。
(昭和十八年二月)

日華交友錄



昭和十八年十一月二十五日印刷
昭和十八年十二月十五日發行
第一刷二〇〇〇部

定價二圓十錢
特別行爲相當額
賣價二圓十錢

著者	高木陸郎
發行者	東京都世田谷區玉川奧澤二ノ三〇一 救護會出版部 代表 中田 隆 郎
印刷所	東京都牛込區榎町七 大日本印刷株式會社 榎町工場
印刷者(東東一)	秋葉
發行所	東京都世田谷區玉川奧澤二ノ三〇一 救護會出版部 會員番號二〇七〇八號 振替東京二〇二二七七番

(出版承認)
一四〇六五〇號

配給元 東京都神田區淡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

救護會出版部既刊

老子哲學の長短 淺井正純著

詩經美學國風篇 井乃香樹著

歌集 丹 青 中野菊夫著

救護會出版部近刊

西亞細亞の繪畫 森田龜之助著

印度點描 伊藤龜雄著

寄宿舎の少年工 濱館貞吉著

二A 三圓七五
頁判

四B 三圓六八
頁判

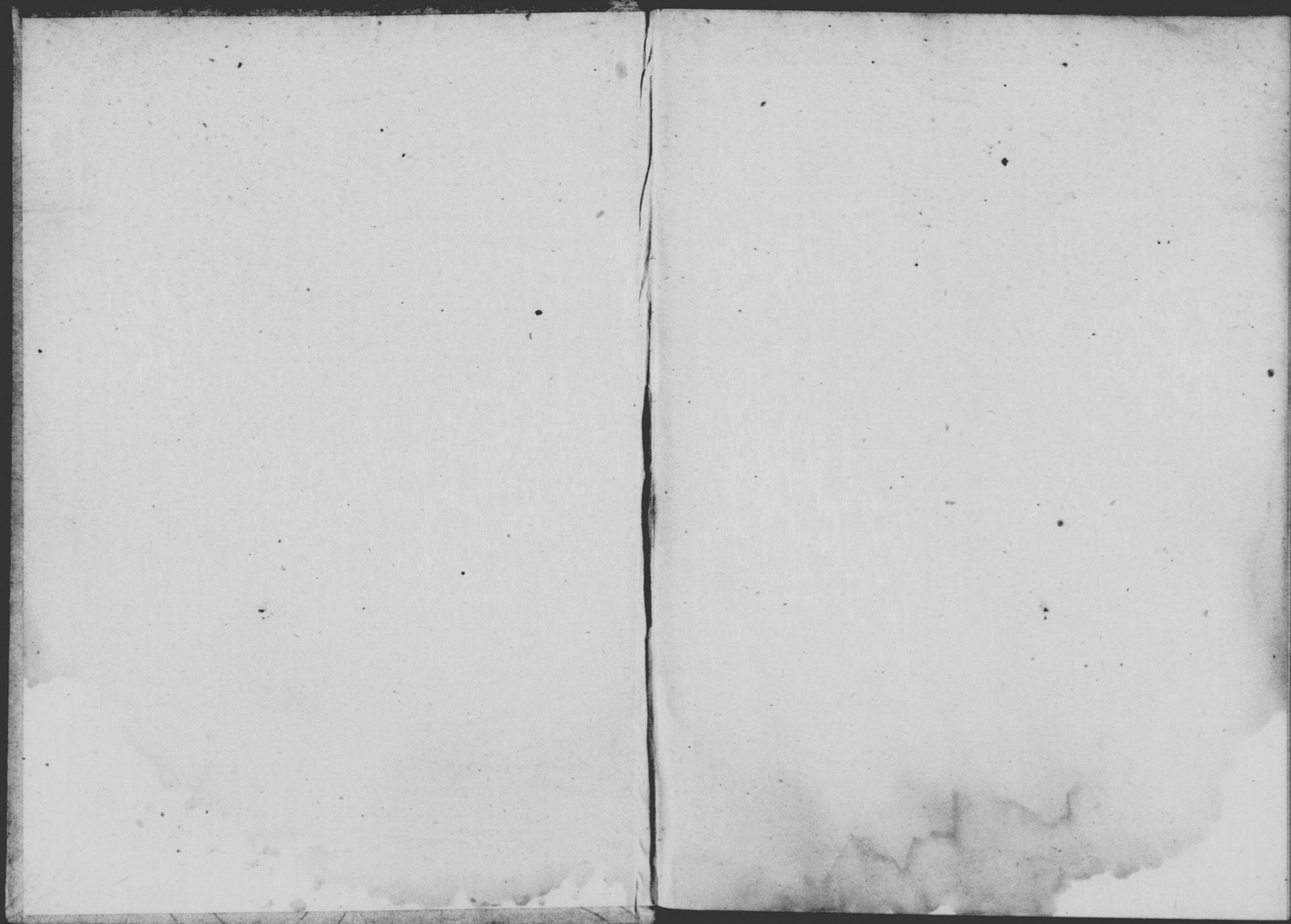
一B 二圓九六
頁判

約二B 二圓五六
頁判

約二B 二圓五六
頁判

約二B 二圓五六
頁判







社團法人救護會出版部刊